

二人討論会 パート2

二人討論会の相手がくじ引きで決まった時、田島浩平の顔からは思わず血の気が引いた。恐怖の倉沢（くらさわ）英一。この男にだけは当たりたくなかった。

倉沢は話を通じないというのではない。それどころか成績は学年でもトップクラスだった。だがこの倉沢は……。

「田島君、……始めようか。」

倉沢は音もなく浩平の横に立っていた。青ざめた顔はまるで亡霊（ぼうれい）のようだ。

「ああ、始めよう。今日のテーマは、山に行くのと、海に行くのとどっちがいいかだ。倉沢君、君なら山と海とどっちがいいかい？ 君のタイプなら山に行くほうがいいんじゃないかい？」

「山か……。」

倉沢は暗い目をして考えこんだ。

「そう、澄んだ空気にきれいな景色。頂上から眺めれば地上の世界なんかまるでおもちゃだ。それまでくよくよ悩（なや）んでいたつまらないことなんか、もうどうでもいいようなすがすがしい気になるんだ。どう？ 山の方が良さそうだろう？」

「そりゃあまあ、頂上に行き着くことが出来ればね……。」

倉沢は深いため息をついた。

「いいかい田島君。物事には順序がある。一気に頂上に行きつくわけではないんだ。まずリュックをしょった君は山道を登り始める。最初は軽快だった足取りがだんだん重くなる。もう山の中腹（ちゆうふく）にさしかかっ  
ていて、あたりは昼とは思えない暗さだ。」

この辺でそろそろ一休みしようかなと思った君の頭にコツンと何かあたるものがある。上を見上げるとそこには、首を吊（つ）った男の死体がだらんとぶら下がっている……。死後何日経ったのか、見開かれた眼には小さな蛆（うじ）虫がびっしりとたかり、ぞわぞわとうごめいているんだ。」

「ぎゃっ。」

「恐怖にかられた君は、がくがく震える足でその場を立ち去る。どこをどう走ったか分からない。のどはもうからからだ。そこに、きれいな山水が流れているのが目に入る。助かった。そう思った君は無我夢中（むがむちゆう）で水をすくって飲むんだ。やつとちよつと落ちついた君はそこではじめて口の中が妙にぬるぬるしているのに気付く。変だなと思って口の中を手でぬぐうと、その指には無数のヤマヒルが頭をもたげている……。」

「げええ。」

「君はあわてて水を吐き出そうとするがその時にはもう遅い。いったん人間の体の中に入ったヤマヒルは君の体の粘膜（ねんまく）を食い破り、君の体中の血を吸い始めるんだ。そして君は気が狂いそうになるほどの時間、山の中をのたうちまわり……。」

「や、やめよう。山は駄目だだめだ。やっぱり海だよ。海。ねっ、頼むから海にしよう。晴れ渡った青い空にどこまでも続く青い海。ねっ、海に行くことを考えよう。海が絶対楽しいよ。」

「そうだね。海の向こうにはボートが浮かんでいる。こいでいるのは二人の女の人だ。」

「うん、よく見ると顔見知りのお姉さんたちだ。こちらが手を振るとお姉さんたちも手を振って、おいでよと言ってくれるんだ。あーあ、海は楽しいなあ。あー楽しい。」

「そう、そして君はそのボートに向って泳いでいく。海の水のほどよい冷たさが肌（はだ）に心地よい。お姉さんたちとボートに乗ったらその後は浜辺で何をしようか。かき氷を食べるのもいいし、ビーチボールで遊ぶのもいい。君の心は楽しい空想で浮き立つ。そして君は海に来てよかつたなあと心から思うんだ。」

と、その時ふと気付くと海面に何か垂直に切り立っているものがある。鈍（にぶ）い灰色をしたそれは君の方にすごいスピードで向ってくるんだ。あつ、鮫（さめ）だ、と思った次の瞬間には、君の右足はもうまるごと鮫に……」

「げげっ、食いちぎられるのかい？」

「いや、そうじゃない。この鮫はもう、よぼよぼにもうろくしていて目がよく見えない。それで間一髪の所で狙いがそれるんだ。君の下腹には鮫の鼻面（はなずら）のぬめつとした気味の悪い感触だけが残る。」

もちろん安心してるひまはない。君の目に、いったん

は向こうの海面に泳ぎ去った鮫がゆっくりとこちらに向  
つてUターンしているのが見える。今度鮫の攻撃を食ら  
つたら最後だ。君は恐怖に引きつりそうな手足を狂（き  
ちが）いのようにばたつかせてお姉さんたちの乗ってい  
るボートに向つて懸命に泳ぐ、泳ぐ。ボートまでのわず  
かな距離が何百メートルもあるかのようだ。やっと君の  
手がボートのへりに届く。君は最後の力を振り絞（しば）  
つてボートに這い上がり、その中に倒れこむ。助かった。  
ほつと安心した君の耳にお姉さんたちの黄色い悲鳴が聞  
こえだす。鮫はまだあきらめていないんだろうか？君は  
首をもたげて海面を見る。」

「えっ、鮫がボートに向つて体当たりを始めるのかい？」  
「いや、そうじゃない。鮫の去った海面にぽっかり浮い  
ているのは君の海水パンツだ。お姉さんたちは君を見て  
悲鳴を上げている。君はあわてて下半身を隠そうとする  
がもう遅い。お姉さんたちは悲鳴を上げながら笑い転げ  
ている。」

「いやだいやだ。恥ずかしくてお嫁にいけないよう。も  
う山にも海にもどちらにも行きたくないよう。」

「だめだなあ、田島君。そのくらいでめげてたら。人生  
もつと前向きに明るく考えなくちゃ。」

倉沢は地獄の使者のような笑みを浮かべて言った。

課題 みなさん同士で二人討論会をしなさい。テーマは

「山に行くのと海に行くのとどちらがいいか」「夏  
休みと冬休みとどちらがいいか」など何でもよい。